

泌尿器科医としての被災地医療支援の経験

泌尿器科 棚瀬 和弥



はじめに東日本大震災で犠牲になられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

2011年7月17日付で全国医学部長病院長会議(AJMC)被災地医療支援委員会より中部ブロック国公立大学附属病院長あてに、岩手県での泌尿器科医療に対する医療支援の依頼がありました。最終的には9月2日より中部地区の各大学病院泌尿器科より2週間

ずつ切れ目のない形で岩手県立釜石病院泌尿器科に医師を派遣することに決まりました。9/2～9/16は名古屋大学より、9/16～9/30は金沢大学より、といった形で福井大学は11/11(金)～11/25(金)及び2/17(金)～3/2(金)が担当になりました。

岩手県立釜石病院泌尿器科はもともと泌尿器科医2人態勢でしたが、震災により内陸部での医療需要が高まり、岩手医科大学泌尿器科から釜石病院への派遣医師が一人引き上げになったそうです。(以前より岩手県全域において医師不足は深刻だったようです。)常勤医ひとりで外来、入院、手術、透析をこなしていくのに疲弊され、今回の支援依頼となったそうです。

岩手県には腎臓内科がなく、泌尿器科医が透析管理を行っています。透析患者さんは透析ができないと生命維持が出来ないため、病院長は「透析の継続」を最重要課題の一つとしたようで、ダイアライザーや超純水などの物品の確保と、泌尿器科医の確保が重要視され、今回の医療支援要請の大きな一因となったようです。

県立釜石病院は沿岸より4kmほど内陸に入ったところにあり、11/11に釜石市に入った時は震災の爪痕はほとんど見られませんでした。震災直後は病棟倒壊の危険があり、耐震工事の終わる8月までは手術室や病棟も稼働していなかったそうです。

釜石病院での泌尿器科業務は、通常の泌尿器科業務+透析管理といった感じでそれほど多忙を極める感じではありませんでしたが、私の派遣期間中は手術が多く、のんびりできる状況でもありませんでした。また、土曜日は2回とも全科日直が割り振られており、常勤の医師と2人で対応しました。大学病院勤務が長くなってきたため全科日直は久しぶりだったのに加え、17:15までの勤務のところ17:09に重症完全房室ブロックが救急搬送されてきたため、とても怖い思いをしました。(すぐに循環器科医師が緊急ペーシングしてくださったので救命できました。)

釜石市沿岸部まで足を延ばすと、津波の被害地域を目の当たりにできました。市の中心部は人が住める状況ではなく、鉄骨がむき出しになった建物や撤去されて瓦礫しか残っていない土地もたくさんありました。一部は信号も復旧しておらず、盗難もあるため、他



県の警察も含めて、たくさんのパトカーが巡回していました。

常勤医師に隣町の大槌町に連れて行ってもらいましたが、さらに悲惨でした。町自体が津波にさらわれてしまい、ほぼ完全に更地になっていました。

津波で被災された方々は、全員仮設住宅に入居が済んでいました。病院の真横にもたくさん仮設住宅が建設されていました。仮設住宅は避難所よりはかなりましなものの、十分な広さがあるとは言えず、防寒対策も十分ではないため、高齢者や小児はすぐに体調を崩します。急性期病院は県立釜石病院しかなく、大槌町は病院も流されてしまったため、遠方からも続々と救急車で搬送されてくる状況でした。病院スタッフの中にも仮設住宅住まいの方はたくさんおられました。受診される方をすべて温かく迎えて必死に治療を行っていました。

私の赴任期間中に県立釜石病院・釜石地区医師会合同症例検討会があり、その懇親の席で地元の開業の先生からお話がうかがえました。たまたま当院耳鼻咽喉科准教授の斎藤武久先生と同門だった先生もおられ、うちとけてお話ができました。3階の天井にあと10cmの高さまで津波が押し寄せ、これ以上高かったら溺れ死んでいたであろうお話や、ご自分の家、診療所も被災され、親戚をなくされながらも仮設診療所で地域の方々のために尽くされているお話などを伺うことができ、大変感銘を受けました。

被災地における「復興」とは、高台の安全な所に自分の家を確保し、安定した職業に就労の上で地域が再度活性化することが目標となるでしょう。被災者全員が「復興」にたどり着くまで何年かかるのでしょうか？被災者の方々は家、車、家族、財産、職業など大切なものを失いながらも、何年かかってでも復興してみせると歯をくいしばって今を必死に生きていました。

遠方に住む私たちには被災者の方々が今後も頑張りを続けていけない状況は感じ取りにくいと思います。震災の急性期は過ぎたものの、現地ではまだまだ乗り越えていかなければいけない困難が山積みです。今回の経験で、一時的な援助だけではなく、継続した援助をしていくことが大切だと身にしみて感じました。被災地で頑張っておられる方々に直に触れることが出来て、泌尿器科医としてというより医師として非常に勉強になった派遣となりました。派遣の機会を与えてくださった山口病院長、横山教授及び派遣期間中私の仕事を代行して下さった泌尿器科医局員の先生方に深謝いたします。



釜石市周辺部（派遣当時の画像）



仮設住宅群